

# 心豊かな生徒の育成と教師の学びの場

川崎市立生田中学校

## 1. 実践の内容

本校では創立 60 周年を記念して作られた「ビオトープ」を中心に、「思いやりのある豊かな心の生徒の育成」を実践している。野原、森林、水辺の減少に伴い、生徒の自然体験が少なくなっている。生徒は自然の「いのち」とのふれ合いを通じて命の大切さを学び、他者への思いやりを学習している。また、環境学習の施設の維持管理と地域の自然環境の保全活動を通じ、日本各地の自然環境問題についても学習している。体験学習を通して身近な環境に関心を持ち、環境を保全するために自ら行動する生徒の育成をめざしている。



毎年、梅雨の季節に見られるカエルの大発生。「足下注意」の表示も 3 年目になり、生徒は自然現象に季節の変わり目を感じる。

トンボの回遊池として作られた池は、理科の授業では生物や環境学習の場に、また、国語の授業では俳句の着想を得る格好の場になっている。さらに、道徳では「ミズカマキリ」「クロメダカ」「アサザ」などの絶滅危惧種を題材として、生命について考える場にもなっている。



## 2. 実践の成果

緑化委員会の中心生徒が代表として、愛知名古屋国際環境会議「子どもCOP10」に参加した。ビオトープには在来和製の種を選んで移植し、職員玄関前の水槽には多摩川の外來種と在來種が比較展示され、生物多様性の学習の場となっている。生命尊重の考えのもと、地域の自然保護に取り組む生徒の普段の学習発表の場として、また、未来を担う子どもの立場での国際交流の会議の提言の場として有意義な経験となった。



環境やエネルギー・資源の学習成果を発表し合う場として「エネルギー子どもワークショップ 2012」を開催した。その中で、生物多様性について小学生向けに問題を提起した。静かに迫る地球温暖化の影響下で、現在の多摩川が外來種にとって最適な環境であること、在來種の生物遺伝子の保護の必要性、環境保全のために在來種を守ることの重要性、環境に適応し増える外來種も同じ命であることの理解など、未来の自然環境について次世代が高い意識で考えることの必要性を、映像と実物の提示、紙芝居などを通して考えた。



## 3. 実践のポイント

ビオトープ・観察農園などの維持管理活動を通じ、生態系の仕組みを学習できるように計画を立てるとともに、自然環境の保全活動を通して身近な環境に関心をもつような指導助言を心がけている。バードレストラン・水槽係・農園管理など、公募で集まる生徒のボランティア活動を推進し、興味・関心を高めるとともに、学校全体で多くの生徒が活動に参加できる機会を増やすように努めている。身近な環境に関心を持ち、環境を保全するための行動を自ら起こす生徒の育成をめざしている。